
宇宙の唄。

土田秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙の唄。

【Nコード】

N2986Q

【作者名】

土田秋人

【あらすじ】

まずは海に行こうと思った。

大学受験をひかえる中、高校生最後の夏休みを原付一台でいけるところまでいってやろうと目論む少年、なかいかずひろ中井一博。田舎道をかけ進み、たどり着いた先で出逢ったのはとてもかわいくて、でもとても奇妙な少女で――？

自分の住む世界のようにちょっとSFなボーイミーツガール、そら宇宙の唄。

ファースト・コンタクト その1

どうして行き場をなくした人間は海に向かおうとするのか。

二時間サスペンスドラマのラストなどいつも決まっているかのよう
うに海にたどり着く。自殺をはかろうとする犯人のもとへギリギリ
のところ^{デカ}で刑事が到着し、涙^{なみだ}涙に手錠をかけるという流れなど、い
わば紋所を携えた水戸黄門のようなものである。刑事はここが世界
の果てだと言わんばかりに犯人を追い詰め、いかにもその場面でな
ければ改心しなかったかのような展開を感じるのだが、はたして断
崖絶壁を背に犯人は何を思うのだろうか。

——三十km、越後海岸。

真夜中の車道に浮かぶ案内標識はそう告げている。直進という表
示に従いかれこれ一時間近く原付でど田舎道を走行しているが、よ
うやく目的^{なかいかずひろ}地につくようだ。

中井一博は疲れの混じるため息をついた。

辺りには地平線でも見えそうな田んぼが広がっており、その間を
切り開くように道が走っている。暗くてはつきりとしなが、電灯
の連なる先に山があるようだ。距離からしてそのトンネルを抜けれ
ば、そこは海岸が広がっていることだろう。

一博をのせた原付はまっすぐに田舎道を駆け抜けて行った。

ファースト・コンタクト その2

一博は十七年間生きてきた。

言っちゃ何だが、そこいらの貧乏な家よりはよっぽど裕福な生活を送ってきたと思う。飯は毎日三食あったし、クリスマスになればサンタも現れ、正月の御節だってちゃんとありつけていた。来なくていいと言っても授業参観には決まってきた。運動会にもばかでかいカメラをもって応援しに来た。そこそこの進学校に入れるだけの成績だってあった。手際は悪いと思うが運動だってみんなの足を引っ張らない程度にはできた。

——だからだろうか。

核心的な意味で失敗というものをしたことがなかったのではないかと、と一博は思う。

テストで悪い点をとったことだってある。試合に自分のミスで負けたことだってある。

でも、そんな薄っぺらいものではないのだ。

人間の失敗とは、そんな薄っぺらい言葉で語れるようなものではないはずなのだ。

成功だってそう。テストで百点をとったってなんの役にも立たない。ガキのころに自転車に乗れるようになったことのほうが、今思えばよっぽど大きな成功だろう。

高校三年にまでなって、ふとそんなことを思ってしまったのだ。

だからいわばこれは将来組み込まれる社会とやらに対するわずかな反抗心。受験勉強やら補修やらから少しのあいだ逃げ出す、そんな時間のむだとやら。

こんな自分を大人は非行だのぐれただのとぬかすのだろうか。

——大きなお世話だ。

人生に一度くらい、自分の力だけで行けるところまで行ってみたいのだ。

有り金もすべて合わせればそれなりの額になる。使い道もないのにバカみたいにバイトしていたのが、こんなところで役に立つとは思わなかった。

まずは海にぶち当たるまで進むのだ。そしたら海辺の民宿にでも泊まって、うまいもんでも食って、温泉に入って、それから、

——それからどうしたものか。

それからは——、まあそれから考えればいい。

あと五キロもすれば海道に出る。原付を停められそうなところを探して、海まで降りよう。

海に行くのなんていつ以来だろうか。どうしてだろう。ずいぶんと昔のことで、忘れてしまった。

ファースト・コンタクト その3

何時間もかけてきたせいか想像が膨らんでしまい、意外と花火やたき火の跡で汚れた海を見てすこしげんなりとした。海に来るのは何回目だろうか。覚えてはいないが、両手で数えられる程度だと思う。

キャンプをしている輩もいなければ、夜の海を見にくる殊勝なアベックもない。空ではすこし欠けた月が天上から降りようとし始めている。海は秒針を刻むように波が浜に打ち付け、音を立てては消えていった。

せっかくきたのだから海に入るくらいしていこうと思った。

幸いにも生き延びるための荷物の中にタオルは何枚が入っている。夏の海とはいえ夜は冷えるので、泳ぐとまでいくとさすがに気が引けるが、足をつけるくらいということはないだろう。

くつ下を脱ぎくつに突っ込んだ。

こんなことならサンダルできたほうが正解だったのではないかといまさら思う。くつを浜にほっぱり出すとズボンを膝までたくし上げ、海にざぶざぶと入っていった。予想外に冷たくて、やはり泳ぐのはむりと悟った。

波が足に行く手をさえぎられている。足の下で流水が砂を削り、くるぶしまで砂に埋もれた。波がやってきては砂を削りより深く足が埋もれていく。そんな光景が新鮮で、なんだか楽しくなり長い間足を砂に埋めて遊んだ。

何度波が行き来したところだろうか。覚えず、波はおさまり、あたり一面何も聞こえなくなった。

そのときふと、これから始まるはずの夏休みがこれで終わってしまふかのような錯覚を覚えた。いい年になってそんなセンチメンタルな気分になったことがすこし恥ずかしく、もう戻ろうと水平線に背を向けた。

そのときまで気づかなかったのだ。

あまりにもそれは予想外で、足に根でも生えたように動けなくなった。本当に、なぜそのときまでその存在に気づかなかったのだ、と一博は思う。それはすぐ数メートル後ろの浜から自分を見つめていたのだ。それ、というのはすこし語弊がある。一博のすぐ後ろにはひとりの少女が立ちすくんでいたのだ。

「――あ、」

口が回っていない。まず口を開くべきなのかも知らない。一博は石にされたかのように少女から目が離せないでいた。

面食らったのはなにも突然であったことだけではない。

なんせめっちゃめっちゃ美人だった。

栗色の肩にまでかかる髪にすこし幼さを残す顔立ち。年は一博よりもひとつかふたつ下であろうか。線が細く風でも吹いたものならば消えてしまいそうなほど儂げな表情。

一博はとっさに彼女は幽霊だ、などと思った。

第一さっきからぴくりともしないのだ。それに加えてなぜか少女は学校の制服を着ていた。

高校生であろうが中学生であろうがとくに夏休みに入っている。そもそもこんな夜中にあの格好はあまりにも無用心で不自然だ。ついでに言うなら今はお盆の真っ最中。さらに時刻は午前二時、丑三つ時。お盆に姿を見せた水死の幽霊。

そう、女子高生の。

意味がわからないがなぜか妥当と感じてしまう。美人だが、それがゆえに気味の悪さが際立っていた。

「あの――」

と、言いかけたところで一博は気づいた。少女の目はちっとも自分を映してはいないことに。もっと、なにか遠くを見るような目でもはや自分のことなど眼中にはないような様子だった。

はっ、と後ろを向いたもののそこには海しかない。
と、そのとき、

「なにしてるの」

びくっ、と一博は肩を震わせた。

それを見て少女は小首を傾げる。

「なにしてるの」

録音してある言葉をもう一度再生したかのように繰り返した。ビ
ー玉みたいなくなりくりとした瞳で、近所の子供にはなしかけるか
のように聞いてきた。そこでやっと自分に対して聞いているのだとい
う当たり前の事実に気づき、

「えっと、海——あ、そう、海を見る」

何を言っているのだ、と自分で思う。そんなことは見ればわかる
ことではないか。しかし少女は、

「そう」

とだけ言うところちに向かって歩き始め、目と鼻の先で立ち止ま
り、一博を見上げた。

一博はうつ、と息を呑んだ。

顔立ちのせいでもっと小柄だと思ったが、意外とすらりとしてお
り、身長はあった。ガラスでできたような澄んだ瞳がまっすぐに自
分を見ている。むしろ「捕らえている」というほうがただしいかも
しれない。事実、一博は少女に見つけられている約十秒間、時が止
まったように感じた。

波はなおも静かで、風はしんとしている。

たぶんその間、呼吸も、心臓も、何もかもが静止していた。

少なくとも、一博にはそう感じられた。

永遠ともよべる十秒がすぎると少女は何も言わず、ましてや水の
音も立てずに一博の脇を通り過ぎていった。

一博は大きく息をついた。視界から少女が消え、やっと呼吸をす
ることが許された。心臓も順調に脈を打ち始める。そういえばあの
少女はいつ靴を脱いだのだろう、とどうでもいいことが頭をよぎっ

た瞬間、

心臓が大きく跳ねた。

ばっ、と背を向くと少女はすでに胸辺りまで海水に浸かっていた。
「え、ちょ、まって！」

じゃぼじゃぼと水を割っていくが少女は振り向きもしない。とっさに浮かんだワードは「自殺」という単語だった。逆に納得がいった。幽霊じゃなければ自殺をしにきた人間。ならばあの今にも消えそうな存在感にも納得がいくことだ。

納得がいったところで放っておけるわけがない。

水中を歩くのは至難の業だ。水というものは思いのほか重い。必死で海水をかきわけても思うようには進まない。

服は完全に水没し、少女の肩を掴むころには、一博は足がつくかつかないかのところだった。

肩を掴まれた少女は「突然なに？」とでも言いたげな表情でこちらを向くがそれどころではない。首根っこをひっ捕まえると岸に向けて泳ぎだした。

なんせ足元がぎりぎりなせいで踏ん張りがきかないのだ。

少女はあんのじょう流木かのごとく一博に身をまかせ、何もしようとはしていない。こんな身動きのとりにくい水の中で、ましてや服まで着た状態の中、気でも抜いたらものなら本気でふたりともおぼれてしまう。

実のところ、半分くらいおぼれかけていたかもしれない。

突然海に放り出された犬のように必死で泳いだ。

もう何十メートルも泳いだ気分だった。波や比較するものがないためわからないが、おそらく実際は五メートルくらいのものだろう。一博はそこが腰くらいまでしか海水がないことに気がついた。

少女から手を離し、両足を踏みしめ、呼吸をととのえる。水の中を動くのがこんなにもハードだとは思わなかった。それだというの

に後ろの少女は涼しい顔でこちらをおろし、こんなことを口走りやがった。

「――なんのよう？」

さすがにカチンときた。

「何のようじゃないだろ！」

もうすこしでおぼれるところだったんだぞ、と。それにも少女は小首をかしげるだけである。

今の一博は確信したことがある。この少女は幽霊でもなければ自殺志願者でもない。たぶんもっと行くところまでイッている。

おそらく精神病院か何かから抜け出てきたに違いない。若いのに可哀想だ、と一博は思う。きっとテレビか何かで海を見たのだろう。海水浴をする楽しそうな光景を見て、自分も泳ぎたいとでも思ったのかもしれない。

そうして、こんな真夜中に病院を抜け出し海までやってきたのだ。

そう思うと、なんだか不憫に思えてきた。

「君、名前は？」

最悪警察にでも押し付けねばなんとかしてくれそうではあるが、それは何だかわいそうだ。少女はすこし思案をめぐらせたあと、

「なるみ」

と。

「ななせ、なるみ」

聞いたのは自分なのに、なぜかこの少女にも名前があるのだ、ということに驚いた。

「年はいくつ？」

「じゅうなな」

一博は同い年であるということに本気で驚いた。あとは何をたずねたものか、とずぶぬれで思案していると、今まで黙りこくっていた風が急に吹きつけてきた。

「と、とりあえず海から上がろうか」

はやくしないと風邪ひきそうだ、と一博はくだけた笑みでなるみ

を見た。

そいつがまずかった。

両者ともにずぶぬれであるということを理解したうえで直視してしまった。加えるならば、最初に胸元に目がいつてしまったのも男の性であろうか。一博はとっさになるみから目を背ける。

——それは反則だと思う。

水に濡れた制服が肌に密着し、体の凹凸おうつからブラの柄まではつきりと見えてしまった。高校三年生にもなってそんなことでドギマギしているというのも恥ずかしいが、なれていないのだからしょうがない。ピンクであるという衝撃が体中を駆け巡ってどうにかなりそうだった。

煩惱ばかりが頭にちらついてなるみを気にする余裕がなかったが、黙って岸に向かう自分の後ろをちゃんとついてきている気配はあった。はやくあがらないとなるみもそうだが、自分も風邪をひいてしまいそうだ。なるみはひな鳥かのように一博の後ろをぴたりとついてきていた。

しかしまあ海にまで来て余計な拾い物をしたものだ、と一博は思う。まるで飼えもしない捨て猫を拾ったような気分だ。もとの場所に捨てるのはさすがに可愛いそうだから、飼い主を見つけるしかない。

さて、どうしたものか。

実のところ、それに関してはさほど心配していない。名前もわかり会話が成立することもわかった。年齢もおなじくらい。意外と素直そうだし、きっと話せばわかってくれるだろう。

今はそんなことよりも、かばんの中に着替えが二着入っていたかどうかのほうに心配であった。

ファースト・コンタクト その4

なるみに着替えをおしつけ堤防の上のトイレで着替えてくるように言うのと、一博はその間に影ですばやく着替えた。幸いにも着替えは二着ぶんあり、年頃の女の子が着ていてもなんとかごまかせそうな टीーシャツ になるみにはあけわたした。

さて、どうしたものか。

女の着替えはながそうだし、海を眺めて待つのもおつくうだ。このあいだに温かい飲み物でも買ってこようと重い腰を上げる。堤防を上ったところに自販機があったはずだ。そこなら着替え終えたなるみと入れ違うこともないだろう。

腰の砂を払うと堤防に作られた階段をのぼる。海でなれない運動をしたせいだろうか。とにかく体中がいたるところがずんと重い。一段を上るごとに海辺でのやりとりが脳内をぐるぐるとまわる。

——名前は？

ななせ、なるみ。

——年は？

じゅうなな。

しかしまあ情報が少ないものだ。何となく「病院」とか「家族」とかその手のワードが禁句のような気がして、まだ聞き出せずにいた。いずれ聞かなければならないことだが、まだ夜があけるまでくらはいいだろう。

自分から望んで外に出てきたのだ。女子高生だか幽霊だか自殺志願者だか病人だかしらないがやりたくてしていることくらいやらせておこう。誰にだっていろいろ悩みとか問題とかあるもんだ。よっこらしよ、と親父くさい掛け声と共に最後の階段を上りきる。自販機を見つけるとポケットの中をまさぐり、

「あ、」

自販機を前にしてサイフを忘れたことに気がついた。まったく何

をしているんだろう、と一博は思う。サイフはかばんの奥底に入れたままだ。ため息をつききびすを返す。が、

そのすぐ背後に人影があった。

一博はうわあと情けない声を上げた。それも声を上げてから犯人に気づいたものだから、遅れて顔まで赤くなった。

「どうしたの？」

誰だもくそも、なるみであった。よく見覚えのあるティーシャツを胸元がきつそうに着ている。

「さ、サイフかばんごと忘れちゃって」

聞かれたのはそこではないような気がするが、照れ隠しにそうこたえた。と、そこでなるみが渦中のかばんを持っていることに気がついた。

「もどったけど、かばんしかなかったから」

そう言うとはいとかばんを差し出してきた。無用心だからもってきたとでも言うのだろうか。というよりも、いつ入れ違いになったのだろう。瞬間移動装置でもついているのだろうか。

「ありがと。――あ、何か飲む？」

かばんの奥底からサイフを取り出し、百円玉を二枚自販機に入れた。なるみは無言で自販機と対峙^{たいじ}すると、ゆっくりと一番下の段にある右から二番目のボタンを押した。

『北国産あずき使用 粒しるこ』

夏にもおしるこ売ってるんだ、と一博は思った。なるみはガコン、と落ちた缶を取り出すとプルを上げ、一口飲むとなんとも言えない顔でほっと一息ついた。

へえ、と一博は嘆息をもらす。

「おしるこ好きなんだ？」

こくん、となるみは力強くなずき、もう一口すすった。なんだかめずらしいものが見れた気分だった。

せつかくなのでなるみと同じのを買うことにした。小銭を入れな
るみと同じボタンを押す。ガコン、と落ちてきた缶を拾い上げると
プルを上げる。ではさっそく、と一口つけたところで思わず声が出
た。

「あま」

通常にあんこの三倍は甘かった。缶に大きくプリントされた粒の
文字の下を見ると「はてしなく甘さを追求する」のキャッチコピー
がある。

あまりにも甘いものだからどうしようかとも考えたが、ええいと
中身を一気に飲み干した。そのままの勢いでゴミ箱に缶をシュート
する。甘さに震える一博をよそに、なるみはポコポコと底にたまっ
た粒を叩いて落としている。

「——こんな甘いのがいいの？」

なるみは飲み干した缶をカコン、とゴミ箱に入れ、

「あんこは文化」

と言い放った。これは筋金入りだと思う。

さて、一服ついたところでこれからどうしたものか。時刻は夜中
の三時を回ったところ。家から脱走することもありこんな時間に外
にいるが、それもひとりで行動するつもりであったからこそ。あま
った時間は二十四時間開いているファミレスあたりで潰す予定だっ
た。

が、しかしだ。

「その格好はむりだよなあ」

ティーシャツならなんとかなると思ったが、現実はそのままであま
くなかった。やっぱり女なだけあって出るとこは出ている。あまり
気にしないようにはしているが、一博が女性物の下着などもってい
るはずもなく、つまりはなるみの下はあれなわけで、胸なんてもう
かなり危うい。

「このあたりコインランドリーなんかあったっけ」

行きの最中に見かけた記憶もなければ気にもしていなかった。通

ってきたのはずっと田んぼばかりの田舎道だったので、おそらくその通りにはなかったと思われる。

するとなるみは海沿いの道を指差し、

「ここをまっすぐいくと小学校があつて、そこを左にまがってずつといくとミマスってパーマ屋さんの看板がある。そこを右にいくとすぐコンビニがみえるんだけど、そのとなりにある」

いつものおとなしいトーンはそのまま、口はぺらぺらと話し出すものだから一博は度肝をぬかれた。

「け、けっこうしゃべれるんだね」

そう言うとなるみはきよとした顔をし、あらん方向を見ながらしばしの思案。ぽん、と手を叩くと思ひ当たったことがあるという顔でポツリとよくわからないことをこぼした。

「パンツないとさむいから」

ファースト・コンタクト その5

道中は原付に二ケツでやってきた。警察もいなければ車ともすれ違わなかった。しいて言うことがあるなら、二ケツをするのがはじめてだったということ。あとはそのはじめてが女の子だったことがすこし誇らしかったことくらい。

店先に駐輪すると、さきに降りたなるみはじつと店内を凝視していた。

「なにかいいものでも見つけた？」

鍵をポケットに入れながらたずねる。なるみはふるふると首を振ると、

「はいるのははじめて」

見たことはあるが、入るのは今日がはじめて。そういうことだろう。

「使ったことないんだ？」

首をたてにふる。もしかしたらコインランドリーを利用するのがはじめて、というよりも洗濯をするのがはじめて、なのかもしれない。ふとそう思いたずねると、やはりこれも首をたてにふった。

自動ドアをぐぐり中に入る。ドラム式の洗濯機や乾燥機が海賊船の大砲がごとくならんでいる。最寄の洗濯機に百円玉を三枚入れると海水でぬれた服をどさどさと入れた。

「こんなかに入れて？——あ、やっぱ別のほうがいいか」

年頃の女の子だったら、そこいらの男の服といっしょに洗われるのは嫌がりそうなものだ。が、なるみは「なんで？」という顔をすると、ぼとりとビニル袋から服を出す。と、

「あれ、なんか入っぱなし」

制服の胸ポケットに手を入れるとしわしわになった小さな手帳が出てきた。

ばたん、とふたを閉め、開始のボタンをおす。間をおいて水が出

始め、ぐおんぐおんと洗濯機が揺れ始めた。

——生徒手帳か。

ようこう、と読むのだろうか。やけに画数が多くて難しい漢字が二文字による高校のものだった。

ペリペリとめくるが中身はやはり水浸しで何も読めない。まあいちおう、となるみのほうを向いて、

「もうだめだけど、新しいの発行してもらうまでは持っておいたほうがいいよ」

はい、と手渡そうとすると、こちらを向き、

「——うごいてる」

洗濯機を指差しいった。

「うん？ ああ、今洗ってるからね」

おー、という顔で覗き込むと、なるみはその場から動かなくなっ

た。

本当に動かない。覗き込む姿勢から微動だにしない。

することもないので備え付けのイスに座り、直立不動のなるみを観察することにする。

——しかしまああれだ。

なるみを勢いで保護した方がいいが、本当にこれでよかったのだろうか。はつきりいってこんなところで油売ってないで警察に送り届けるのが一番正しい気もする。たぶんふつうならばそうしたと思う。それでも何かが警察なんかにはわたしたらいけないような、そんな気にさせたのだ。

だから、責任をもたなくてはいけない、と一博は思う。

いつかは聞かないといけないことなのだ。

たぶん、それがいまだと思うのだ。

「なるみってさ——」

ふい、とこちらを向く。緊張を必死で押し殺しながら、なるみという少女にメスを入れていく。

「両親は心配してないの？ ほら、こんな真夜中に出歩いててさ」

言った。まずは遠まわしにせめてみることにする。一番あたりさわりのない聞き方だとは思う。

「それとも友達の家にとまるって行ってきたとか」

これにどうでるか、と待ち構えてみると、明後日な方向に回答が飛んでいった。

「佐伯さへきならいるよ」

——誰？

「それは、——親戚のおじさんとか？」

ふるふる、と首をふる。

「ぜんぜんちがう人」

——すこし話を整理しよう。

おそらく両親はいない。しかし、親戚でもなんでもないが、佐伯という人物がなるみをやしなってくれている、ということだろうか。

「その佐伯、って人がなるみの世話してくれてるの？」

こくり、とうなずく。

「ちようせいって言って、いっぱい注射するから、きらい」

調整。

注射。

医者のだぐいだろうか。

なるみの言葉を直接的ではなく、曲げたとらえ方にはなるが、すこしずつ全貌が見えてきたように思う。おそらくこうだ。

両親はもうなるみの生活にはほとんど関わっていない。それは死別なのか、まだ生きているのかはわからない。そして今なるみの生活の中心にいる人物が、話に出てきた「佐伯」さんという人。おそらく医者なのだろう。きっと、なるみは注射や薬など「きらい」なことばかりの病院から逃げ出してきたのだ。

——やはり、なるみは病気なのだろうか。

「あのさ、なるみは、」

「まって！」

うつ、と押し黙った。あのなるみが大きな声をあげた。その驚きと剣幕から思わず萎縮してしまった。

——やはりなにか禁句があったのか。

それがどの部分なのかはわからない。しかしまずは謝ろう、と立ち上がったそのとき、

突如として一博の視界が暗転した。

「うわっ、なに停電!？」

暗闇に放り込まれ一博はひとり慌てふためく。電気が遮断されたことにより店内の備品はすべて停止し、光だけでなく音までもかき消された。

一博が口を閉じれば音を放つものはなくなる。そのなか、足音が反響して聞こえる。

「なるみ! 動くと危ないから電気がもどるまでの間じっとしておいたほうが——」

パツ、と。何事もなかったかのように店内を明かりが満ちた。

よかった。電気が復旧したみたいだ。洗濯機きつと止まってるよ。

あーあ、また百円いれないといけなのかなあ。

と、言いかけてそれをのどに押し戻した。

胃が逆流を起こしそうになった。

最初に気づいた異変は、なるみがどこにも見当たらなかったこと。どこにいったのだ、と立ち上がったところで、自分の服が海で水没させてしまったはずの服を着ていることに気づく。

そして、外ではガラガラと太陽が照り付けていた。腕時計は午前十一時をさしている。

——約六時間の記憶が、すっぽりと消えていた。

むしろ自分をはじめから海など行かずに、仮眠をとるためここで夜を明かしたのだ、と思いたかった。

ふと、そのときなるみに渡しそびれた手帳を、まだ右手に握ったままであることに気がついた。

頭がおかしくなってしまったのではないか、と危惧していた一博は安堵の表情を浮かべ手帳をめくっていく。

そして、最後のページ。そこには持ち主を証明するための顔写真等の個人情報記載されていた。

栗色の肩にまでかかる髪にすこし幼さを残す顔立ち。年は一博よりもひとつかふたつ下であろうか。とても笑顔が特徴的で、活発そうなの、

まるで見たこともない少女の顔写真と、滲んだ名前が記載されていた。

自動ドアをくぐり下界に足を踏み出す。夏が空から降り注いでいる。むわっ、とする空気を思いつきり吸い込み、

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああっ！！！！」

空に向けて、はるか上空を飛ぶ飛行機を落とす勢いで叫んだ。

犬の散歩をしていたおばちゃんが目丸くしてこちらを見つめ、犬は何事だとしっぽをふりながら吠え出した。犬につられるようにセミがじわじわと声を張り上げ、世界に夏を満たして行く。空ではなおも飛行機は飛び続け、一筋の雲が空を二分していく。

飛行機雲がゆっくりと夏の空を描いていく。

一博の夏がはじまる。

六十三億分の一 その1

人生に一度くらい、自分の力だけで行けるところまで行ってみたいのだ。海に向けて原付を走らせ、田舎道を駆け抜けた。本当なら、そのあと海辺の民宿にでも泊まって、うまいもんでも食って、温泉に入るつもりだった。

ああ、どこでなにを間違えたのだろうか。もしかしたら間違いはもっと前にあったのかもしれない。

海まで行こうとか、考えるよりずっと前に自分はおかしくなってしまうていて、たまたまそれがそのときに重なっただけ。そういう可能性もないわけではない。

——ならば、あれは夢だったのだろうか。

全部が夢、だとはさすがに思わない。かばんにねじ込んだ生徒手帳は紛れもない、不確かだが確かな証拠。

ただ、どこまでが本当でどこまでが夢なのか。

そもそも自分ははたして海に出向いていたのだろうか。かばんの中には着替えたはずの服も、なるみに渡したはずの服も、いずれももとのまま入っていた。

わからない。事実は見ず知らずの人物の生徒手帳と、目覚めたところがコインランドリーであったという、このふたつ。

——やはり頭がおかしくなってしまったのだろうか。

それはとてつもなく恐ろしいことだ。自分が見てきたと思い込んでいる「事実」をすべて「妄想」という言葉でかたずけてしまうという完全な否定。自分はまともだ、という確固たる自信が逆に不安を増徴させていく。だが、仮に異常者とするならばその人の言う「まとも」なんて、糞ほどにも役に立たないだろう。

——体調は最悪だというのに、脳みそばかり回転する。はやく眠ってしまいたいというのに、周期的に不安の波が心臓を揺さぶる。

気づけばカーテンの隙間から光がさしている。ほとんど眠れぬうち朝を迎えてしまったようだ。

客間を改造してつくったと思しき畳張りの一室。あるものはとうと、バカでかいブラウン管のテレビと机に置かれた湯沸しポットくらい。こんな部屋にとまるのは中学の研修旅行のとき以来だ、と一博は改めて思った。

件の事件のあと、一博は本来の予定通り民宿を探した。予定とひとつ違うことといえば、条件にあの海辺から近い民宿であるということ。

一博が民宿に現れたときの顔はそうとう酷いものだったらしい。チェックインを済ませると、女将さんはすぐ部屋に布団をしいてくれて、薬まで持ってきてくれた。

薬を飲むと崩れるように布団になだれ込み、うまいもんも食わず、温泉にも入らず、あまり眠ることもできなかったが、ずっと目を瞑っていた。

眠れなかったのは事実だが、昨日の事を思えばすこしはマシになったと思う。それにすこしはお腹もすくようになってきた。なにせ丸一日何も食べていない。すこしくらいは腹に入れないと本気で倒れかねない。

もぞもぞと布団から抜け出すと、一博は朝食を求めおぼつかない足取りで部屋を出ていった。

六十三億分の一　その2

『民宿　あさくら』は海辺に位置するしがない宿屋で、不景氣なご時勢家計が火の車なのは今に始まったことではない。創業は祖母の代であり、一昨年の交代を経て今や三代目。昔にしては立派だったのであろう構えはもうなく、先月の雨漏りに始まり老朽化は進む一方である。

近代化に次ぐ流行というやつか、さくねん昨年目と鼻の先にホテルだのという田舎にも似合わぬ建物ができた。まったく迷惑きわまりないことであるが、部屋もきれいな温泉つきで飯もうまいとの評判。少ない客もどんどん吸い取られ、今では残ったお得意様や年に数回の団体客でなんとか生きながらえている始末。

そんななか昨日、妙に顔色の優れない客が宿泊したいとあわられた。あまりにも血色が悪いものだから、すぐに布団をしき解熱剤を渡した。

宿泊していく年齢層と比べてやけに若い客だ、と思った。年は娘とほとんどかわらないだろう。そして、近所の高校生ならまずこんなところにはこない。

長年店を回してきた女将の朝倉俊子あさくらとしこは経験上、この手の客と余り関わりにならないほうがいと知っている。

十中八九家出だろう、と俊子は思う。イントネーションもこの辺りのものとはすこし違つて聞こえた。

海に何を思い馳せてきたのか知らないが、この風邪を期に家に帰って欲しいものだ、と俊子は思う。

——きつと親御さんも心配していることだろう。

二子の母としての、率直な気持ちだった。

しかし、まずは風邪を治さなくてははじまらない。小皿に受けた味噌汁を味見すると満足げにうなずき、鍋のふちをカンカンと叩く。せめて客は客としてしばしの療養をしていつて欲しいものだ。余

り関わりにならないほうがいいと知っていても、一女将としてそう思った。

六十三億分の一　その3

「――あ」

カメのような鈍さで階段を下りていると、御膳を持った女将さんと鉢合わせになった。あらまあ、という顔で一博を見上げると、女将さんは御膳を目配せして「ちょうど持っていくところだったんですよ」と言った。

完全に研修旅行のノリでいた一博はどこか朝食を食べる部屋が別にあるとばかり思っていた。ふと大広間にひとり寂しく朝食を食べる自分を想像し、まだ頭が回っていないと確信した。

朝食は和食だった。病み上がりとしてはありがたかったが、それでも半分食べたあたりで箸がとまった。

胃がいよいよやをする。吐き気はないが胃の中で渦をまいているのがわかる。

――あれから丸一日たった。

あの日のことはつい昨日のことだというのに、ずっとずっと過去のことに感じるになってしまう。現実離れ過ぎて「昨日」というページに記憶することを脳が拒否している。

今日は一日、なるみを探してみようと思う。もしかしたら見つからないかもしれない。それでも三日間くらいは彼女を探すのに費やしてもいいかな、などと思えた。

三日探してもだめなら、あれは夢だったのだと思える気がするのだ。――気がするだけ。それはぎりぎりの、妥協をするかしないかの線引き。

渦巻く胃袋に残りの朝食をかきこんだ。胃がひっくり返るのではないか、というほどの波がきたが水を流し込むとすぐに落ち着いた。やってしまえばどうということもなかった。そう思うと生気がみなぎってきたような気がした。

しばらくすると、女将さんが食い散らかした朝食とセミの抜け殻のような布団の後片付けをしにやってきた。時間も惜しいので、チェックアウトまで時間はあるが出発の準備をする。

かばんの中からサイフを取り出しジューパンのポケットに入れる。原付の鍵はどこに埋まったのだろう、と掘り進んだ先、あの生徒手帳に目がとまった。

「あの――、女将さんひとついいですか？」

女将さんは三つ折にした布団を抱えながら「どうかしましたか？」と笑顔で答える。一博はそっと、机の上に生徒手帳をおいた。

「この高校って、近所にあるんですか？」

女将さんは手帳の表紙にある学校名を一目見ると「ありますよ」と即答した。やけに滑らかな口調でソフトボール部が強いだとか、このあたりだと偏差値も上位だとかを話し、加えて口頭で道まで教えてくれた。やけに詳しいなと思っていると、女将さんは満面の笑みで、

「うちの娘も通っていますので」

――実を言うと、この高校の所在地は地球の裏側まで考えていた。少なくとも県のふたつやみつつ挟むのは覚悟していた。そんな一博にとって、この距離はとてもありがたかった。原付でなら三十分かそこらでつくだろう。

かばんを背負い、チェックアウトのお願いし、一階に下りていく。階段を下りる途中、背中から女将さんが思い当たったことがあるように声をかけてきた。

「すみません――、私からもひとつよろしいですか？」

なんだろう、と一博は思う。思ったところで、自分が女将さんの立場だったら自分に対していくらでも質問できてしまうことに気がついた。

一博はいぶかしげに見ると、女将さんは聞くべきか悩むような顔をした後、予想のはるか斜め上をいく角度から爆弾を投下してきた。

「あの――なぜ女子高の生徒手帳をあなたが？」

六十三億分の一 その4

一博は拾ったの一点張りで難を逃れ、目下逃げるように原付を走らせていた。真夏の直射日光はやわな現代人にはきつく、信号に引っかかるたび洪水のような汗が湧き出してくる。

――三つ目の信号を右、三つ目の信号を右。

女将さんから教えてもらった道順を脳内で繰り返しながら進む。

ぶっちゃけ女子高だと知ったときはいくのをやめようかとも思った。――不審者と勘違いされたいやだし。

でもここで引き下がるのも何だか負けた気がする。手元に残った唯一の手がかりなのだから、何か情報のひとつくらい手に入るだろう。

入らなければ困る。なんとしてでも、見つけなくてはいけない。

到着してから気がついたものだから本当に救いようがない。もとより先生に話を聞くつもりなんてなければ、そんな勇氣もない。部活動をしている生徒を数人捕まえて話を聞くつもりでいた。

下界はお盆シーズン真っ盛りであった。部活動をしている生徒なんていないどころか正門も硬く閉ざされていた。

ため息。ため息しか出ない。

別の方法を見つけなくては、と引き返そうとしたとき、

「あの、うちの高校に何か用ですか？」

と、ジャージを着たこの高校の生徒と思しき、おとなしそうな少女が声をかけてきた。学校が使用できないからランニングをしているのだろうか。その後ろには対照的に活発そうな短髪の少女が、明らかに不審そうな顔をして睨んでいる。

――まあ、ふつう不審に思うか。

しかしこちらとしては好都合だ。何部かしらないが、当初の予定通り話を聞くことができる。

「別に怪しい者じゃないよ？　ちょっと落し物を届けにきたんだけど――」

と、ポケットから生徒手帳を取り出し、最後のページを開きふたりに見せた。短髪少女がずかずかとやってきて手帳をとりあげると「見にきいな」とごちりながら目を凝らし、おとなしめの少女は後ろから覗き込む形をとる。

反応したのはほぼ同時だった。

おとなしめの少女がポツリと何かつぶやいた。一博はそれが何か理解する前に、短髪の少女に信じられない力で胸ぐらをつかまれた。わけのわからないことをわめき散らしながら正門に叩きつけられ、一博は面食らってなすがままだった。

少女はかまわず吼える。

「なんでこのタイミングで持ってくるんだよッ!？」

気づくと、片割れの少女は立ちすくんだまま泣いていた。そのとき、少女のつぶやいた言葉は手帳の少女の名前だと気づいた。短髪の少女は悪態をつくと駆け寄り胸をかす。

「エリは一月前に海で行方不明になったよ。だからそんなもの届けられても迷惑だ。――持ってくなら警察に持ってってくれ」

二度と面見せるな、と吐き捨てる少女は肩を支えながら去っていった。一博はその背中から目が離せなかった。

なんでこう、うまくいかないのだろう。やるせない気持ちばかりが肺に溜まっていき、うまく呼吸ができない。

くそっ、と壁に拳をつきたてる。

壁は揺るがず、ただ拳が痛かった。

六十三億分の一　その5

結局のところ、一博はなんのコマを進めることもなく民宿あさくらに帰還した。あの後、もう一度おなじところに宿泊するのも何だか損な気がして、近辺のホテルをあたって見たのが驚愕の値段に腰が抜ける羽目となった。

五時ごろに再び来店すると、女将さんは一博を覚えていたらしく「また来たのかい」という顔をした。かわりに、まだ風邪が治りきらなかったのか、という旨を聞かれた。またしてもそんなひどい顔をしていたのだろうか。

部屋に到着すると同時に一博は座布団の山へダイブする。ごろりと仰向けになり木造の天上を眺める。たしかに今日も精神がまいるようなめにあつたものだから、顔に出ていたのかもしれない。

——行方不明、か。

一月もまえということは、あたりまえだが無事なわけではない。あのふたり組みのほうがその事実を痛感しているだろう。

なんでかなあ、とぼやきながら寝返りをうつ。そんなつもりで言ったわけではないのだが、なぜかうまくいかない。

自分のみに怪奇現象が起きたかと思えば、次は行方不明ときた。近々自分も手帳の少女と同じ運命をたどるのではないか、と思うとゾッとする。

あーだのこーだの悪い考えばかりが頭をぐるぐる回るうち、チェックインしてからわりと時間がたってしまった。こんなことでは何をしにきたのかわかったものではない。頭をぶんぶん振って悪い考えを追い払う。あー、とうだりながら体を起こし、

「——風呂、」

昨日風呂に入らなかったものだから体が気持ち悪い、いまさらなことに思い当たる。たしかここは露天風呂があつたはずだ。

カバンに手を伸ばしタオルやパンツ、その他もろもろを引きずり出す。――風呂に入れば、嫌なことも忘れられそうだ。

部屋を出て、階段を下りる。すると下からひょこりと女将さんが姿を見せ、「あら」という顔をした。

ちようどよかった。ついでの風呂場までの行きかたを聞こう、と階段をおりていく。と、

「――げ、」

あからさまに嫌そうな反応に女将さんは首を傾げるが、原因は彼女の背後にある。女将さんに娘がいるという話をしていたの思ひ出す。

――よりもよってそれはないだろう。

昼間に出会ったあの短髪少女が威嚇する目でこちらをにらんでいた。以前会ったときとは変わってジャージではなく、ぜんぜん似合っていない割烹着かっほうぎを着ている。さすがに客と認識しているのか飛び掛っては来ない。まさか休息をとりにきたはずが、そこが敵の本拠地だとは思ひもなかった。今夜辺り寝首でもかかれるのではないだろうか。

そんなこととは露知らぬ女将さんは営業スマイル全開で、

「入浴場でしたらこちらのつきあたりを右にありますよ」

と、一博の質問を先回りして答えてくれた。一博は引きつった顔のまま、

「――あ、ありがとうございます」

と言うと、そそくさと早足でその場を後にする。背後を見ずとも背中にピリピリとする視線が突き刺さり、こちらを見ていることがあからさまにわかる。

右に曲がり、のれんをくぐる。さすがにここまでくると視線は感じなくなった。

――ため息をつく。疲れのウェイトがもう一キロほど肩に追加されたような気分だ。自分にはもう安息の地は存在しないのだろうか。そう思うと、一博はすこしだけ泣きたくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2986q/>

宇宙の唄。

2011年2月6日04時25分発行